

タイトル 『アップルパイな人々』 作 黒川 陽子

登場人物 男二人 女一人

兄

妹

益岡

兄が玄関のドアを開けて入ってくる。
ドアの外で妹の音がする。

妹の声 兄さん！

妹が入ってくる。

妹 訳を言いなさいよ、訳を。

兄 訳なんかない。

妹 訳を言いなさいよ、訳を。

兄 俺はあいつにお前のことを紹介してやっただけだ。

妹 じゃあ、あの言い草は何？（兄の口調を真似て）こいつはこう見えて精神がひどく不安定だね。今でこそこうして長い髪をしているが、前に突然、自分でバツサリ切ってしまったことがあったんだ。床屋にも行かず自分でだよ？ いつ何時、理由もなくおかしなことをするかわからないから、俺は冷や冷やしているんだ。（口調、戻って）こんなつまらないことを言ったのはなぜ？ 訳を言いなさいよ。

兄 事実を言ったままで。

妹 事実なものですか。じゃあ、あれは何よ。（兄の口調で）こいつは、最近までずっとオネシヨをしていたんだ。

兄 していただろ。

妹 小六までよ。

兄 最近じゃないか。

妹 私もう十六よ。あと、あれも酷かったわ。（兄の口調で）こいつは慌てたり緊張したりすると口調がおかしくなるんだよ。

兄 事実じゃないか。

妹 事実なもんですか。

兄 事実だろう。お前さっきもこんな感じになってたじゃないか。(おそらく先ほどの妹の口調を真似て) 違うんでござるのよ、違うんでござるのよ、益岡さん。私、最近までオネシヨなんてしとらんでござる。

妹 そんな話し方してないわ。

兄 (引き続き妹の口調で) 髪の毛は切ったかもしれないけれど、ちゃんと理由があったのでござるよ。

妹 やめなさいって。

兄 (妹の口調で) 理由もなく切断なんてしないでござる。

妹 切断!

兄 お前、「切断」って言ったじゃないか。

妹 兄さんにあんなこと言われたら、口調の一つや二つ変になって当然よ。(兄の口調で) ハツキリ言っただけな益岡くん、こいつは君の思うような人間じゃない。

兄 (妹の口調で) あなたの思うような人間よ、益岡さん。私おかしなところなんてひとつも所持・所有・保管してないわ。

妹 (兄の口調で) 俺は兄貴だからわかるんだけどな、こいつにはどこか、動物のようなところがある。

兄 (妹の口調で) やめなさいよ、兄さん。

妹 (兄の口調を真似て) 理性とか分別とか、人間らしく暮らすために必要なものがないんだな。

兄 (妹の口調で) あるでござるよ、あるでござるよ、益岡さん。

妹 (兄の口調で) ついでに常識もない。

兄 (妹の口調で) 常識だつてあるでござるよ。だからこそこうして、一人きりの家族をあなたに紹介しとるんやないですの。

妹 (兄の口調で) うちが親父もお袋も早くに死んでしまったから、こいつの面倒はずっと俺が見てきたんだ。その俺が言うんだ、こいつは変人だ。

兄 (妹の口調で) 変人じゃない!

妹 (兄の口調で) 変人だろう!

兄 (妹の口調で) 私は常識人よ!

妹 (兄の口調で) 長く交際していこうと思うならな、悪いところも残らず知っておいてもらった方がいいんだ。まあ結局、あいつはお前を受け入れられずに逃げてしまったわけだが。

兄 (妹の口調で) 逃げたとは限らないわ。

妹 (兄の口調で) 逃げただろう。デザートのアップルパイも食べきらずに席を立ったんだ。

兄 (妹の口調で) あの人はアップルパイが嫌いなものよ。

妹 (兄の口調で) 嫌いなものを注文するもんか。

兄 (妹の口調で) 注文するのよ。わざと嫌いなものを注文して、小食なふりをするのが好きなの。あの人は私より、ずっと変人で変態なのよ。

チャイムが鳴る。

続く

作品名 『手のかかる子供』 作 黒川 陽子

登場人物 男二人

男1

男2

ここは天上の世界。男1がひとり、下界を見下ろして淋しげな表情をしている。
そこへ黒づくめの男2がやってくる。

男2 こんにちは。

男1 こんにちは。

二人、下界を見下ろす。

男2 痛ましいですね。

男1 でも、こうするよりほかなかったんです。

男2、男1を見て了解したように頷く。

男1 まさか、あんなに悲しまれるとは思ってなかった。

男2 あれ、お母さんですか？

男1 僕の側に座っているのが母です。白髪が多いでしょう。

男2 おいくつで？

男1 今年で五十です。

男2 それにしては……

男1 僕のせいなんです。僕がさんざん心配をかけたから。

男2 子供は心配をかけるものですよ。

男1 そんなもんじゃない。大人になってからの方がむしろ心配かけましたからね。二浪して入った大学を一年でやめて、しばらくは仕事にもつかないでぶらぶらして。挙句の果てが自殺ですよ。

男2 自殺ほど、親を悲しませるものはありませんからね。

男1 こうするほかなかった。でも母のあんな姿を見ると、悪いことをしたなあって思うんです。

男2 もう丸一日ですか。

男1 え？

男2 お母さん。霊安室にいらしてから、ずっとあなたの側を離れようとしなない。

男1 見てたんですか？

男2 手のかかる子供ほど、可愛いつて言いますからねえ。

男1 (ふと、男2のことが気になり) あなた……

男2 はい？

男1 いえ……。ちなみに、どうして亡くなったんですか？

男2 え？

男1 ここにいる以上、あなたも亡くなったんですよね。

男2 ええ。

男1 自殺ですか？

男2 わたしは自殺するタイプではありません。

男1 病気？

男2 いいえ。

男1 それじゃあ、天寿を全うされたんだ。

男2 まさか。

男1 でも、それじゃあ……。

男2 殺されたんです。

男1 (驚いて) えっ？

男2 まあ、気になさらないでください。

男1 いやいや、え、誰に殺されたんですか？

男2 まあ、それは……

男1 事件か何か？

男2 あの、わたしのことは気にしないでいいですから。

男1 でも……。

男2 (強調しながら) ほんつとに、気にしないでいいですから。

男1 (相手の語気に圧され) はい……。あ。

二人、下界を見る。

男2 綺麗な方ですね。

男1 (シリアスな表情になり) 僕の婚約者です。

男2 ああ……。

男1 僕だっつてずっと手のかかる子供でいたかったわけじゃない。今年の秋には結婚して、母を安心させるはずだったんです。そのために就職もした。

男2 それなのに……なぜ自殺を？

男1 彼女のせいです。

男2 彼女の？

男1 ええ。

男2 でもほら、お母さんとも仲良さそうに喋ってる……

男1 母は彼女のことを大好きですよ。今でも最高の婚約者だと思っっているはずですよ。

男2 彼女が何を？

男1 裏切ったんです。母はこのことは知らない。(ふと嫌になり) もういいじゃないですか。

男2 浮気ですか。

男1 えっ……

男2 お金持ちの男性に乗り換えようとしたんですよ。

男1 あなた一体誰ですか。

間。

男2 でも、案外そうでもないようですよ……

男1、男2に促されて下界でのやりとりを眺めるうち、驚愕の真実を知る。

男1 そんな……

男2 どうやら思い違いだったようですね。

男1 えっ、(頭を整理し) 僕が、部長に彼女を紹介して……

男2 その前から知り合いだったようですね。むしろ彼女が口をきいてくれたおかげで、

あなたは。(下界を見て) ああ……泣いてしまっている。

男1 そんなはずない。彼女も部長も、明らかに初対面だったのに……

男2 口裏を合わせてくれたんじゃないですか？

男1 え？

男2 彼女の口利きで仕事につけただなんて、あまり格好の良いことじゃないですからね。
(笑い) しかもお母さんから彼女に頼んだみたいだ。

男1は呆然としている。

男2 あなたがちゃんとした職につけるように、みんなが気を遣ってくれていた、そうい

うことみたいですね。

男1 死ぬんじゃないかった……

男2 でも、彼女を苦しませたいと思って自殺したんでしょう？ うまくいったじゃないですか。

男1 それは彼女が浮気していると思ったからこそ（ふと）あなた一体誰なんですか。

男2 え？

男1 僕のことそんなに（知ってて）……

男2 癌です。

男1 ああ。……え？

男2 癌。病気の、癌。

男1、気もそぞろに下界を見る。

男2 そんなに落ち込むことないですよ。どっちみち、あなたは半年後には死んだんです。

続く

作品名 『彼女たち』 作 黒川 陽子

登場人物 女二人

客

美容師

美容院。

客がスモックをつけられて椅子に座っている。正面にある鏡をときどき自信なさげに見る。

美容師が近づいてくると、客は鏡から目をそらす。

美容師 カットを担当させていただきます、藁谷カヨです。

美容師、客に名刺を差し出すが、客はスモックが邪魔で受け取れない。

美容師 あ、じゃ、こっちに置いときますね。

美容師、名刺を作業台に置く。

美容師 今日はどうしましょう。

客 あのっ……

美容師 はい。

客（自分の髪に触れ）こことか、ちょっと重いかなくて……

美容師 カットするのはいつぶりくらい？

客 けっこう久しぶり……

美容師 ほんとに。（客の髪を指でつまみ、鏡を覗いて確認しながら）じゃ、けっこう軽くする感じでいきますね。

客 お願いします。

美容師 形はあんまり変えない感じで？

客 はい。

美容師 わっかりました。

客、近くにあった雑誌を取って開く。

美容師、霧吹きで客の頭を濡らす。

客、一度開いた雑誌を閉じ、霧がなくなるのを待つ。
しばしの間。

美容師 学生さんですか？

客 はい。

美容師 ほんとに。

客 あの、卒業したばかりです。

美容師 はいはい、この前袴の子たちね、たくさん。おめでとうございます。

客 ありがとうございます。

美容師 じゃ、袴着たんだ。

客 着ましたねえ。

美容師 いいなあ。わたし大学出てないから袴とか着られなかったんですよ。え、何色の袴着たんですか？

客 ……グレー？

美容師 グレー？

客 はい。

美容師 え、グレーの袴なんてあるの？

客 はい。

美容師 ほんと。すごいねー。

美容師は客の髪をクリップでまとめ終わった。

美容師 じゃ、心機一転って感じかな？

客 (受け流す感じで) まあ……

美容師 お仕事とか、ぼちぼち始まる時期ですもんねえ。あ、その前に入社式か。

客 はい。

美容師 じゃあ今もうドキドキな感じだ。

客 はい。

美容師 へえ〜。

美容師、にこにこしながら、

美容師 新入社員ですもんねえ。え、何系の会社ですか？

客 あのだ……わたし就職しないんです。

美容師 そうなんですか？

客 はい。

美容師 あ、すいません。

客 いえ。

美容師 なんかわたし……うるさいですよ？

客 いえ。

美容師 仕事に専念します。

客 すいません。

美容師 いやこちらこそすいません。

客 すいません。

美容師 あ、もうハサミ持ったんで大丈夫です。

客 あ、ほんとですか。

美容師 すいません。

客 すいません。

美容師、客の髪の毛を切る。

客、一瞬雑誌から目を上げる。

美容師、濡れて指に貼りつく髪の毛の切れ端を落とす。

客 美容師さんて。

美容師 はい。

客 専門学校とか出るんですか？

美容師 そうですね。私は東京美容専門学校ってところに行って、二年ですか。それからここに就職して。

客 大変ですよ。

美容師 いーえー。

客 結婚とか、なさってるんですか？

美容師 まだです。

客 あ、ほんとですか。

美容師 まだですー。残念ながら。

客 あ、ほんとですか。

美容師 うん。三十までにはねー、したかったんですけど。ま、最近みんな遅いからいいかなーって。

客 あ、ほんとですか。

美容師 お客さん彼氏……

客 はい？

美容師 彼氏とか今いるんですか？

客 (曖昧に笑う)

美容師 あー、いるんだ。

客 いや……

美容師 いいなあ、いるんだ。

客 はい。

美容師 え、何年ぐらい？ 付き合って。

客 四年……

美容師 マジですか？ じゃ、結婚とかも、考えたり……

客 (曖昧に笑う)

美容師 マジですか？ え、まさか。

客 はい？

美容師 就職しないってそういう……

客 (頷く)

美容師 マジですかー？ え、結婚ですか？ 今年？

客 予定はですけど。

美容師 やだー。おめでとうございます。

客 どうも……

美容師 なーんだ。さっきね、あたし悪いこと聞いちゃったかなとか正直思ったんですよ

お。だって、えっ、ほんとっすかー？

客 あ、でも詳しいことは全然決まってるじゃないんですけど。

美容師 (客が引くくらいに驚き) えー……、でも失礼ですけど、まだ二十……

客 いま二十二です。

美容師 ですよねー。勝ち組もいとこじゃないですかー。

客 いや、ほんとにまだ……

美容師 そっかあ、勝ち組かあ。おめでとうございます。

客 ありがとうございます。

美容師 じゃ、綺麗にしないとね。

客 (微笑)

美容師 じゃ、綺麗にしないとだー。おめでとうございます。

客 ありがとうございます。

美容師 え、え、え、彼氏ってタメですか？

客 タメ？

美容師 同い年。

客 はい、大学で。

美容師 若けー。

客 いったも二十二ですよ。

美容師 (客が饒舌になったので笑う) そっか、新妻かあ。

客 いや、そんなことないですよ。

美容師 (別の方を向いて) いらっしやいませー。

新たな客が来たらしい。

美容師 新妻かあ……

間。

美容師 実は私も彼氏いるんですよ。

客 えっ、ほんとですか？

美容師 最近ね、できまして。

客 いいじゃないですか。

美容師 そうなんですよ。ほら、一応これでもサービス業じゃないですかあ。もしお客さんがねえ……あれで、自分だけねえ……あれってことになったら悪いなあと思ったんですよけど、お客さん幸せすぎるから大丈夫だなあって。これでも彼氏いるんですよ。

客 「これでも」って…… え、格好いいですか？

美容師 若いんですよ。

客 十代？

美容師 そーれは犯罪でしょう。あ、もしかしたらタメかもしれないですね。

客 え？

美容師 二十二……三？ 今年卒業なんですよ。

客 ほんとですか？！

美容師 お客さんあれですか、大学ってその……慶應？

客 そうです。

美容師 じゃ、知ってるかもしれない。小堀健太って知ってます？

明らかな間。

美容師 小堀健太。あ、でも、学部違ったら知らないかな。

客 ……。

美容師 やっぱ今年卒業なんですよ。あ、でも、学部違ったら知らないかな。

客 彼氏？

美容師 最近。

客 ……。

美容師 あ、それは知ってる顔だ。ごめん、仲悪い人だったりとかした？

客 環境情報学部の小堀健太？

美容師 やっぱ知ってたんだー。ほんとごめんね。

客 なんで謝るんですか？

美容師 気まずくない？ いきなり知らないおばちゃんに知り合いの彼女でーすとか言われたら。

客 彼女？

美容師 (自分を指して) 彼女。あーダメだ、喋りすぎだ。集中。集中。

美容師、客の頭のクリップを外し、おろした髪を切る。

客は正面の鏡を見ている。ただし、自分の顔を見ているわけではなく、隣に映る美容師のことを凝視しているらしい。

客 あっ。

美容師 ん？

客 (ひとり言で) 同姓同名なのかも。

美容師 なにがですか？

客 ちなみにどういう字ですか？

美容師 えっ？

客 小堀健太。どういう字ですか？

美容師 「小さい」に……「土」って書く「堀」に……(何かを察して) ごめん、わたし漢字弱いから。

客 (じつと美容師を見ている)

美容師 「健康」の「健」に……「太い」。小堀健太。

客 じゃあ、同姓同名だ。

美容師 え、二人いるんですか？ 双子？ 違うか。えっ、ちよつとよくわからない……

客 わたしの彼氏ですけど？

美容師 え？

客 小堀健太。

続く